

特集 佐世保の近代化遺産

皆さんは「近代化遺産」という言葉を聞いたことがありますか？
近代化遺産とは、幕末から昭和三十年代初頭までに造られた建造物のうち、近代的な手法で建設され、日本の近代化の歩みを象徴するものや近代化に貢献した建造物などを総称した呼び名です。わたしたちの住む佐世保は近代化遺産の宝庫といわれています。今回は本市の数ある近代化遺産の中からその一部をご紹介します。



旧海軍針尾送信所

大正11（1922）年、中国大陸や太平洋方面との連絡のため、旧海軍によって建設されました。太平洋戦争開戦を告げる暗号「ニイタカヤマンボレ」はここからも発信されたといわれています。建設から80年以上たった今でもひび一つ入っておらず、当時の鉄筋コンクリート構造物建設の最高技術を現在に伝えるものとして貴重な構造物であるといわれています。写真は3号塔で、高さは137m、基底部の直径は12.12m、頂上部の直径は3mあります。壁面の厚さは76cmで基底部の外周は33mにもなります。（針尾中町）

佐世保を変えた勅令第三十九号

明治十九（一八八六）年五月四日、勅令（天皇の命令）第三十九号が交付され、佐世保に海軍鎮守府と軍港を設置することが決まりました。これを契機に佐世保は、鉄道や水道などの施設が次々と整備され、人口が急増し、同三十五年には市政が施行されるなど、急激な変貌を遂げました。こうしたことから佐世保の近代化は、この勅令から始まったといわれています。

佐世保村（市）の人口推移

年	人口（人）
明治20	4,238
30	22,578
40	76,012
大正6	113,967
昭和2	133,581
12	175,723
22	176,653
32	258,870

世界屈指のドックと二つの東洋一

明治二十六年三月、鎮守府造船部（後の海軍工廠・現佐世保重工業株式会社・佐世保造船所）によって、艦船の建造や修理を行う第一船渠（ドック）の建設工事が始まりましました。これは石積み工法により建設され、同二十八年十二月には開渠式を迎えました。が、漏水などがあつたため、実際の使用

は同三十六年からとなりました。完成後は一万五千トンクラスの軍艦が入渠可能で、「世界屈指の大船渠」といわれました。同所には現在六基のドックがあり、かつては完成順に第一船渠、第二船渠と呼ばれていましたが、今では西から順に第一ドック、第二ドックと呼ばれています。

明治三十八年、艦船の泊地としての機能を強化するため、海軍工廠によって立神係船池の大工事が始まりましました。これは工廠と前方海上の大蛇島、小蛇島などを結ぶ大規模なもので、工期に十一年を要し、大正五（一九一六）年に完成しました。その規模は、およそ縦三六〇メートル・横五七五メートル・壁の高さ一五メートル・深さ一〇メートルで、当時は「一万トン級の船九隻を同時につなげる東洋一の施設」と称されました。

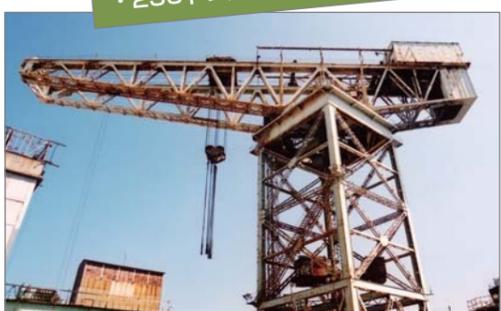
大正二十年十月、佐世保にもう一つ東洋一の施設ができました。海軍が英国サー・ウイリアム・アロール社に発注し、同社の技師によって据え付けられた二五〇トン起重機（クレーン）です。高さ約四二メートル、水平に突出している梁の長さ約八〇メートルもある大型起重機は、艦船の改造や修理に画期的な威力を発揮しました。

佐世保重工業（佐世保造船所）第5ドック
（旧佐世保鎮守府造船部第一船渠）



現在、ドックの山側（写真手前）半分は壁面がコンクリートで補強されていますが、海側（写真奥）半分では完成当時の美しい切石の壁面を見ることができます。（立神町）

佐世保重工業（佐世保造船所）
250トン起重機（クレーン）



このタイプのクレーンは世界で17基、国内では3基しか残っていないといわれています。今なお現役として活躍し、本市の代表的な構造物として市民から親しまれています。（立神町）



旧海軍佐世保鎮守府庁舎
（佐世保市史軍港史編より）